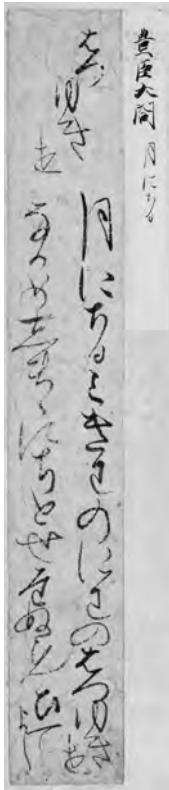


たんざくてかがみ ひっちん  
短冊手鑑 「筆陳」



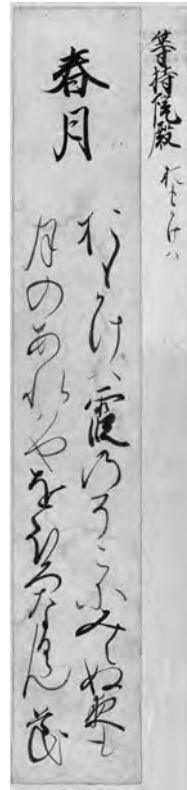
豊臣秀吉(1537-98)  
短冊。おおらかな筆跡でかかれています。



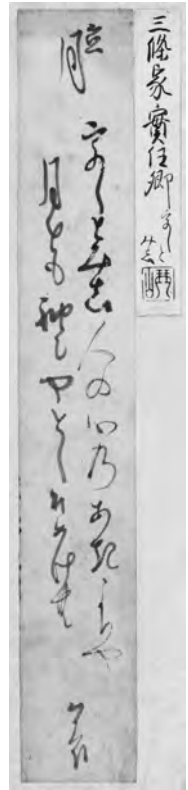
細川幽齋(1534-1610)  
短冊。美しい装飾料紙を用いています。



後奈良天皇(1495-1557)短冊。肉厚で重厚な筆跡。



足利尊氏(1305-58)  
短冊。著名な武将も和歌を嗜みました。



三条実任(1264-1338)  
短冊。現存する短冊で最古級。

「短冊」という言葉を聞いて、どのような場面を思い出すでしょうか。七夕の笹飾りでしょうか。細長い色紙に願い事と名前を書いて笹の小枝に括りつけた記憶のある人も少なくないでしょう。

この「短冊」は、もともとは和歌や俳句を書き付けるための用紙で、縦三〇cm、横五cmほどの紙片に歌題と和歌、その作者の名前を記しました。もちろん、自作の和歌や俳句を自筆で記すことを原則とします。

短冊は、著名な歌人や文筆家の肉筆として、現在の私たちが有名なサインをあつめるのと同じように、コレクションの対象となりました。バラバラの紙片では整理も難しく、全体を見渡すことも簡単ではないため、コレクションブックとして丈夫なアルバムが作られるようになりました。これを手鑑と呼びます。豪華な仕立てに著名人の筆跡が張り込まれた手鑑は、江戸時代には婚礼や贈答などの社交の道具としても用いられたので、現在伝わっている以外にも相当数が作成されたと考えられています。

国文学研究資料館に近年収蔵された短冊手鑑は、表紙中央に「筆陳」と記された外題が貼られていて、それを呼称としています。現在の山口県下関市辺りを治めた長府毛利家の旧蔵と伝える上下二帖からなる大部な手鑑で、各短冊の脇に貼られた極札という江戸時代の鑑定書によれば、後宇多天皇(一二六七—一三二四)以下の天皇・公家・武家・能筆・僧侶・連歌師・芸能者など一七六枚の短冊を収めています。現在、当館において共同研究を行っており、全容の解明にはしばらく時間がかかりますが、上記のような著名人の筆跡や下絵などで美しく装飾された用紙を用いた短冊が張り込まれています。

「書は人なり」とも言われるように、それぞれの筆跡には個性があります。互いを比較してみると、小さくくると回るような文字や肉厚の文字、バランスのよい配置やなんとなく不安定な配置、堂々と黒々染められた筆跡やかすれてしまっても気にしないような筆跡などの特徴が見えてきます。筆跡を通して、書き手の心持ちや性格までもが分かるような気がしてきませんか。短冊の魅力は、そうした往古の人々へと思いを馳せる縁となることにもあります。

(海野圭介)